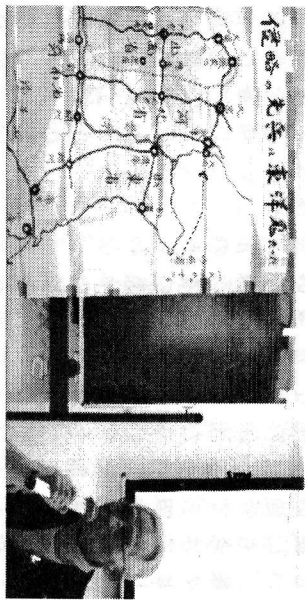


証言・講演録 ① 苦しくて聞いてください

戦場での人間喪失



兵士達の沖縄戦を語り伝える会世話人／本会会員 近藤 一

私は数えて八十九歳になります。頭の方も、だいぶ老化が進んで、とんちんかん話になる時もありますので、ご容赦していただきたいと思います。

現役入隊して中国山西省遼寧に直送

私は、一九四〇（昭和十五年）年十二月二日、京都市岡崎公園（平安神宮前）に集合し、第一乙種として現役入隊しました。

京都にいたのは三日間ですが、その間に訓話や三八式歩兵銃（さんぱちしきほいじゅう）の持ち方、徒歩訓練、グレートル巻きの訓練などがありました。その後、大阪港から輸送船に乗せられて出発しました。「大陸に行く」とは言われましたが、大陸のどこかは、まったく知らされませんでした。

船は徴用された貨物船で、船倉の蚕棚に寝ました。玄海灘に出ると海は大荒れで食事はまったく喉をどおりませんでした。

塘沽（タンク）と言う当時の軍港に上陸して、列車に乗り、北京、南の石家荘を経由し、石太線の陽泉で下車しました。

陽泉は石炭の町という印象でした。そこから、一日トラックに乗せられて南に下り、和順を通り、山西省の遼寧（今は左権県）に着きました。そこが第十三大隊の大隊本部がある町で、私は、

アジア太平洋戦争へと拡大した一九四二年「十二月八日」を記念して、二人そろって八十八歳の「語り部」代表、撫順戦犯管理所の人類史の人間変革を体験した中国帰還者連絡会の小山一郎さんと、その証言が二冊もの著書に記録され、日中韓三カ国の教科書『未来をひらく歴史』にも登場した本会の近藤一さんと、家永三郎・藤原彰・江口圭一亡き後の戦争・戦争責任問題を軸とする現代史研究の第一人者吉田裕さんを迎えて、「戦場体験をどう受け継ぐのか」という重い課題にとり組みます。

かつて私たち日本人はなぜ侵略戦争を許し、担ったのか、そして今ふたたび「戦争国家」への道を許すのか？ 皆さんと一緒に考え、語り合いたいと思います。

以上の趣旨で開催された講演会は、直前十二月三日の朝日新聞「ひと」欄に近藤一さんが紹介されたことでもあって、百四十人定員の会場が満席となりました。菊地副代表理事の開会挨拶、安川副代表理事の司会、体調不良で講師を辞退された湯淺謙さん（中国で軍医中尉として生体解剖に関わった）の証言ビデオで始まり、各四十五分の証言の後、吉田さんから、加害証言

の重要性、時代の雰囲気や日常性を伝えることの必要性、「語り部」と研究者とのスレ、軍事用語辞典の必要性など、多面的な講演をいただきました。

六十分の質疑応答をうけて、吉田さんの「まとめ」発言、猪熊代表理事の開会挨拶で終了。当日は競争体験を受け継ぐ活動に関わっている関係者がたくさん来られていたので、質疑応答の後半は、司会からの指名で、「日本軍兵士・近藤一」の著者、「ある日本兵の二つの戦場」の編者、中国人元慰安婦を支援する会の班会長、戦場体験放映保存の会の中田事務局長、「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」の会員の皆さんに貴重な発言をいただきました。

なお当日の講演会について、十二月二十七日「毎日新聞」が小さな記事で伝えました。

以下、三人の証言・講演録をご紹介します。

本稿は二〇〇八年十二月七日「不戦兵士・市民の会二十周年記念」として日本青年館において講演されたものです。録音 豊森 淳一 アシスト 白水美代子 修正・見出し 白水英一郎 ノット 換 潮田順弘 写真 高信一 レイアウト 森脇靖彦 講師 校閲 済み。